

## 今、世界で一番求められているもの

イラク戦争の根底にあるのは、イスラム教とキリスト教との戦いで宗教戦争だとも云われています。であるならば、一神教であるこの二つの宗教は、ユダヤ教という父親的宗教から生まれた長男のキリスト教と、次男のイスラム教です。すから、いわば兄弟で戦いをしているようなものです。

一人の独裁者が宗教心を利用してジハード（聖戦）と称し、国民を戦いの場へ導き、ついには国を滅ぼす。歴史上、学んでいるはずですが、また繰り返してしまいます。相互の正義の名のもとに、物を破壊し、人を傷つけ、その結果、怨みだけが残っていきます。怨みは憎しみを伴って増幅していくだけで、そこには決して平和な世界は生まれないのです。

お釈迦さまは

まこと 怨み（うらみ）は

いかなるすべをもつとも

怨みをいだくその日まで

この地上には やみがたし

ただ うらみなきにたのむること

この怨みは息（や）む

これは易（か）わ りなき真理（まこと）ぞ

（法句経・友松田詠訳）

と説かれました。怨みを捨ててこそ、初めて平和が訪れるのです。

法然上人もまた、自らその怨念を捨てて仏門に入りました。

父・時国が、稲岡庄の預所・源内武者定明の怨みを受けて夜討ちにあい、その傷がもとで亡くなります。その臨終に九歳の勢至丸を呼び寄せて、「我はこの傷で死ぬであろう、しかし敵を怨んではいけない、もし遺恨を結ぶとその仇は代々つきないだろう。早く俗をのがれてわが菩提をとぶらう、自らの解脱を求め、皆の救われる道を求めてくれよ」と遺言されました。

敵 味方を忘れ、怨親平等の平和の世界、いわば、この教えを忠実に実行して法然上人は出家されたのです。

「父の遺言忘れがたくして」と後年度々述懐されていた上人の胸には、父の遺言がそのままお釈迦さまの声として刻みつけられていたであろうと思われま。これが上人の求道の原動力となり、やがて恨みを忘れて怨親平等に救われてゆく、お念仏の教えを開かれました。

（和名・ラミンギ）



今、世界で一番求められているもの、怨みを捨ててこそ平和が生まれるということ。共に歩いて行くという願いを持ったとき、怨みは静まってゆきます。今こそ法然上人のお念仏の教えを世界に響けと打ち鳴らす時でしょう。毎月二十五日の正午をもって、十遍のお念仏を称えろ『世界平和念仏の日』を浄土宗では提唱致しました。

まさに、『法然上人の心を世界へ』であります。

南無阿弥陀仏